四代の記

村田修子

今でも私の家に残っている一枚の写真、これを不思議な感慨を持って眺めていた小さかったときの自分の姿を思い出すことができる。

それは、ちょんまげこそゆっていないけれども、かみしもをつけた男の人、まげの左右から太いこうがいの出ている髪を結い、裾に綿の入った厚手で、しかも日本刺しゅうのしてある着物をきた女の人、そういう姿の三組の夫婦が並んでいるもので、橋の渡り初めの記念写真だという。その式は三代の夫婦の揃っている家の者がするしきたりだとかで、丁度母の家の条件がそれに当てはまっており、毎日とてもとてもにぎやかであったことを見る度に聞かされた。本当のところ私はそれを見ても何の感激も湧かなかったし、逆にその茶色く古めかしいものに対して嫌悪感さえ持ったような気がする。

今、自分の周りを見回すと、なんと四代で生活している。最初これに気がついたとき、本当に指を折って数えてみた。そして、「あの写真よりすごい」と思うと同時に、現代の核家族の

多いなか、「自分のところが……」と半ば夢のような気がした。その中で何となく生活してはいるものの、この四代という長さの中では、ものの見方、考え方、はこび方等々、時代によりさまざまな違いがある上、年ごとに変化してゆく身体的なもの、それに附随しての心の動き、これ等が四代の構成員全部が刻々と変るので、身近な者同志であっても矢張り気を配って過さなければならず、それに無頓着であっては決して快く過すことはできないことを感じる。

私の立場はいつの間にかおばあさんということになっているが(以後私を中心とした呼び方で記す)、母は孫が生れる迄の呼び方で、おばあちゃまと呼ばれ、又ときには、どうしてそうなったか分らない「アイヤ」と上の孫がいい出したのをそのままみんなで使っている。母を見ていると、こまごまとした手先の仕事を根気よくすることは以前と一向に変らないけれども、孫とのかかわりの中で例えばイデオン、ピンクパンシャー(下の孫はそういう)を口まねして母が、「イデオ」「ピンクパンサ」等といおうものなら「イデオン」「ピンクパンシャー」と正される。逆に「センカンスイ」(潜水艦)、「スタベッキー」(スパゲッティ)と孫の話に出てくると母は「そうじゃないでしょ」と訂正する。「ああそうか」ですめばいいが、孫の機嫌の悪いときなど、「いいの! おばあちゃまはだまって」、そうすると私か娘が「……そんないい方はしないのよ」とたしなめる。ということになり、一つのことで家中ががやがや、わいわいとなり、どっちかがいい気持になれば、どちらかが引込まなければならない、という状態がしばしばある。

孫たちは母とお風呂に入ろうとしない。勿論体力的に無理なことなので吾々もそうさせようとはしないけれども、私が「渡り初め」の古い写真を見て嫌悪感を持ったのと共通するものがあるように思われる。お風呂から出たときでも、母が手助けをしようとすると、二人は辞退、というより拒否する。手のがさがさした感じとか皮膚の感じがそういう態度をとらせるのではないか、と思わせる対応の仕方をする。けれど夜「水を飲みたい」とか、「自分だけ何かしてもらいたい」、というようなときは、「アーヤ、お水ちょうだい」等とくっついて回って目的を果す。小さくてもちゃんとその対応の仕方を心得ているのには顔を見合わせてしまう。

孫が勝手なことを言っているときに、母があっさりとしりぞいたり、要求を入れてやることを大変にうまくやっている。私

は仕事上孫の話をよく聞いてやったり、話し相手、遊び相手になってやるのでいつもくっつかれているけれども、これから先、孫たちが大きくなって、むずかしい時期になったときなど母のような対応の仕方ができるかどうか疑問に思っている。

もう一つ、次のような場合の心使いが大切なのではないかしらという気がする。

母にとって小さい子どもは可愛いには違いないが、自分が動くことで精一杯であったり、孫の動く様子を見ているとあぶなくて仕方がないのでよく文句を言ったりしている。そうすると孫たちから思わぬ反応があるので「さっきこんなことを言った」等と私や娘に聞かせたり愚痴をいうことがある。そのとき「彼はこうなるだろうと思ってやってみたけど、そうならなかったから怒ったのでしょ」とか「前に私たちがこういう話をしていたから、自分もそうしようとやってみたんでしょ。仲々積極的でえらいじゃないの」といったようにその理由や因果関係を解説したり、子どもの成長には当り前のことだということを理解してもらうようにもってゆくと「そうね」とその中間にいた者に同調する態度をとってくれるのであとに残るものが少ないような気がする。

このことは、老人福祉などの関係で、お年寄りの仕事をなさる多くの方たちにも、何かの役に立つのではないかという気がする。

お年寄りの話を聞いて上げることも勿論大切なことであるけれども接触する世界が少なくなっていて、自分の考えに固執することの多い人たちには、特にいろいろな立場の話とか、そのよってくるところのわけなどを他人が聞かせて上げると、案外分ってくれるものである。

また普段家に居ることの少い男性陣に対しても、何かあったとき、毎日の流れと異る成り行きになって、子どもに混乱を与えることにならないように、娘が先ずそれを受けて処置するように仕向けてしまう。そういうおばあちゃんたる私は、この四代の中にいて、四季でいえば「秋」という存在でそれぞれを眺めている。そして一代目と四代目の様々な違いに、ときの移り変りを感じながら、「春」たる孫たちの細胞の新しさ、すばらしさに驚異の眼を見張っている現在である。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）